

亀ヶ谷真琴 編 西須 孝 編集協力

こどもの整形外科疾患の診かた 第2版

—診断・治療から患者家族への説明まで

服部 義 (あいち小児保健医療総合センター)

日本の少子高齢化が止まりません。厚労省の統計によれば2018年の出生数は91万8397人、合計特殊出生率は1.42で出生数、出生率とも3年連続の減少となっています。こどもが少なくなれば、当然こどもの整形外科疾患患者も少なくなり、全国で小児整形外科疾患を診る機会がますます少なくなってきました。

そのような状況の中、日本小児整形外科学会が行った发育性股関節形成不全(DDH)全国多施設調査では、2年間の乳幼児未整復脱臼例1,295人中、199人(15%)が1歳以上の診断遅延例で、また3歳以上まで診断されなかったこどもたちが36人いて、調査するとそのほとんどが乳児健診を受けており、さらにその中には医療機関を受診していたにもかかわらず診断されていなかったこどもたちも多くいました。DDHのみならず、こどもの整形外科疾患の見逃しや誤診断は、こどもや家族に与える影響は大きく、時にはその後のこどもの人生に大きな負担をかけることにもなります。

このような診断遅延や誤診断を防ぐべく、一般整形外科医の小児疾患診察の手助けとなる一冊として、2011年に出版された本書の初版は、整形外科外来に常備しておくべき成書として、大いに役立ってきました。その後8年が経過し、待望の第2版がこの度出版されました。初版と同じく編集は亀ヶ谷真

琴先生、編集協力は西須孝先生の千葉県こども病院の師弟コンビであり、そのもとに、日本にとどまらず世界の小児整形外科のメッカともいえる千葉県の小児整形外科グループの先生方が著者に名前を連ねています。対象疾患は初版の40疾患から64疾患に増えており、また文献に基づいた最近の知見も追加提供されています。特に本書が有用となるのは整形外科外来にこども・家族が来院し、その診断・治療方針に不安を感じたときであり、本書をひもとけば、たちどころにそのさまざまな不安が解消されます。まず疾患別に患者家族からよくある質問が羅列され、その回答、診療上の留意点、さらに専門医に紹介するタイミング、疾患の解説・治療法まで親切に記載されています。まさしく整形外科外来に置いておくべき座右の書と言っていると思います。小児整形外科の英文でのバイブル的成書“Tachdjian's Pediatric Orthopedics”(いわゆるタヒジャン)に対して編者自らが名づけた「亀ジャン」と呼ばれる本書が、日本におけるバイブル的小児整形外科の成書になり、少なくなりつつある小児整形外科疾患の基本知識の啓発に役立ち、疾患をもつこどもたちの診断遅延や誤診断が多少でも減れば、小児整形外科医にとり幸甚この上ないことと思います。

(B5 頁432 2019年 定価: 本体9,000円+税 [ISBN978-4-260-03677-1] 医学書院刊)